518 5-22

シリーズ ミサイル基地 現場から

敵基地攻撃の要塞化

「日米安保の縮図」 沖縄 本島中部

敵基地攻撃能力の保有に向け、地対艦ミサイル部隊の配備が予定されている沖縄県うるま市の陸上自衛隊勝連分屯地。隣接する沖縄市では、陸自沖縄訓練場にミサイルを保管する弾薬庫などの建設が狙われています。「日米安保の縮図」とも指摘される本島中部で戦争準備の姿に直面する人々の怒りは―。（田中智己）

沖縄の地上戦終結から14年たった1959年6月30日、嘉手納基地を離陸した米軍ジェット戦闘機がうるま市（旧石川市）内にある宮森小学校に墜落しました。一瞬のうちに児童11人、住民6人、事故の後遺症でひとりの命が奪われ、210人の重軽傷者を出す大惨事となりました。

戦前に逆戻りか

当時、現場で消火活動にあたっていた伊波宏俊さん（83）は、火事になった民家が「ドタン屋根だからガソリンが燃え尽きるまで水をかけても消えなかった」と振り返ります。

伊波宏俊さん

伊波英代子さん

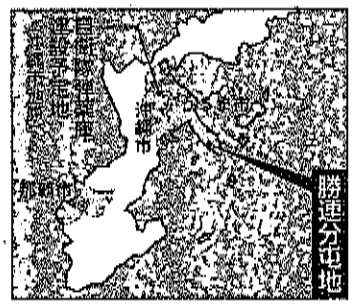
英代子さんは戦時中、サイパン移民の両親のもとで生まれました。弾薬庫建設やミサイル配備が進む沖縄のいまの風潮を見ていると、終戦間近のサイパンで父親や住民が日本兵に殺された記憶がよみがえります。「思い出しなくないよ。自分の掘った防空壕（ごう）を追い出されてさ。小さい子どもたちが泣き叫んでいれば、敵に気づかれるって言って、殺せって」

辺野古新基地建設反対運動などにも積極的に参加していたという英代子さんは、政府が沖縄の声を聞いていないと憤ります。「きれいな島にミサイルとか、あんな危ないものが来てほしくない。石垣や宮古でね。絶対やったらいけないさ。もう苦しくて、苦しくて」

勝連分屯地へのミサイル配備に反対する「ミサイル配備から命を守るうるま市民の会」に所属するうるま市在住の中村義信さんは、「まるで戦前に逆戻りのような雰囲気だ」と話します。

同じく「市民の会」メンバーの伊保妙子さんは昨年末、岸田政権が安保3文書を閣議決定して以降、辺野古ゲート前での座り込みの際に規制が強まっていると指摘します。「警備の人の言葉が荒っぽくなっている。〝へいくあっちみそーれ〟（早く歩きなさい）と方言を使って、ちゃかしてばかにしてくることもあった」

妙子さんの夫、義雄さんは「日本のマスコミは何を考えて報じているのか。復帰前の方がまだ良かったのではないか」と嘆きます。



うるま市勝連小学校付近から見える陸自勝連分屯地（高台）

弾薬庫に抗して

安保3文書を先取りした日米共同演習が相次いでいる沖縄では、顕在化する安保政策の転換に、住民の生活が脅かされています。日本共産党の島袋恵祐県議は、4月7日に結成集会を開催した「自衛隊の弾薬庫等建設に反対する沖縄市民の会」共同代表に就任。同24日、弾薬庫建設中止を求める決議文を沖縄防衛局に手渡しましたが、弾薬庫建設について、否定も肯定もしなかったといいます。

島袋氏は「沖縄市の弾薬庫に加え、うるま市の勝連分屯地のミサイル配備もある。中部一帯で敵基地攻撃能力をつくる軍事要塞（ようさい）化が始まっている。二重にも三重にも危険な状況に置かれているのがこの地域だ」と訴えます。

一方で、結成集会には想像以上に多くの人が集まったといいます。地元地域の自治会長らも声を上げ始めました。「いままでの市民運動とは違うものになっている。今後、運動をどう広げて世論を形成していくか。これからが重要だ」

勝連分屯地から車で約20分ほどの近距離にある浜比嘉島（はまひがしま）で本屋「本と商い ある日」を営む高橋和也さんはミサイル配備を知って、「危機感を覚えた」と話します。今年に入ってから、島内に鳴り響く米軍などの軍用機を見る回数が増えてきたと感じています。

「本屋もメディアとして、地域の声を届けたいと思っている。抑止力が必要と考える人も含め、お店がいろいろな人たちと、ともに考える場所でありたい」

沖縄国際大学准教授の秋山道宏さんは、ミサイル配備の最前線である石垣島、宮古島、与那国島などの先島では軍事化と生活の場が結びついていることが、より実感させられると強調します。「ただ、その意識は必ずしも沖縄全体に共有されているわけではない」

秋山さんは今後、運動を広げていくために「戦争とは何か」という根本的な問いかけや、軍事化と生活の問題が結びついていることをどう共有していくかが重要だと指摘し、こう呼びかけます。「沖縄での問題を考えるとともに、全国それぞれの地域で起きている軍事化の問題にも注視していく必要がある」